

「北極圏の宇宙クラゲ (1)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

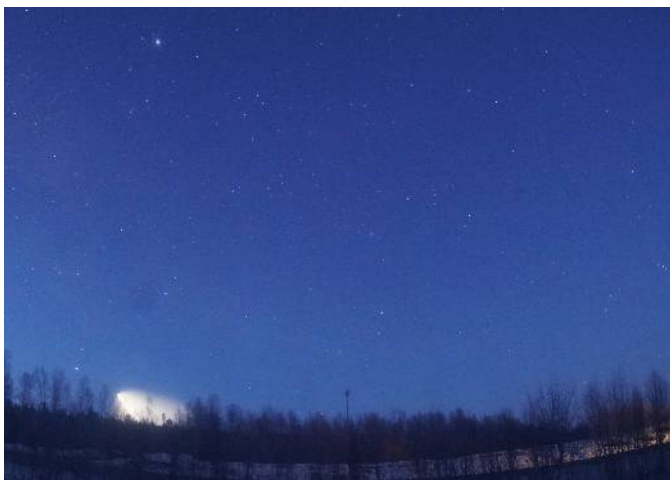
田中 千尋 Chihiro Tanaka

スウェーデンの北極圏、ヨックモック郡ポルユス駅には、オーロラ観測用に3台のカメラが設置してあります。それぞれ東 (NR5 カメラ)、北 (NR4 カメラ)、西 (NR3 カメラ) を向いています。もちろんオーロラ観測と記録が主目的なのですが、時々オーロラ以外の現象も写ることがあります。

一番多いのは「流星」や「彗星」といった太陽系天体です。常に観測しているので、「予告なし」に出現する天体でも逃さずにとらえることができます。

もう一つは、「幻日 (幻の太陽)」「環天頂アーク」「環水平アーク」「上部タンジェントアーク」といった、「鯛光学現象」です。このあたりは北緯 67 度と高緯度なので、太陽高度が低い時期が多いです。北極圏では、こうした珍しい大気光学現象をとらえるチャンスに恵まれているのです。

太陽系天体も大気光学現象も自然現象ですが、時には眼を見はるような人工的な光学現象をとらえることもあります。



2026年4月17日の未明、まず東カメラ (NR5 カメラ) が、地平線付近に白く光る雲のようなものをとらえました。この時期の北極圏は、春分と夏至の間の時期で、夜の時間帯は少なくなっています。午前2時頃になると、地平線付近はやや白んできますが、まだ恒星も見えています。しかし地平線に邪魔されない上空はすでに太陽光が射し、ISS (国際宇宙ステーション) の飛行高度 (約 400km) 付近はすでに「朝」を迎えています。



1 分後、雲のような発光体は、大幅に広がり、下部から斜めに横切る明るい輝跡が見られました。これは「棒状の物体」ではなく、やや長時間露光をしているカメラの影響で、移動する発光体の軌跡が線状に記録されたものです。



更に 1 分後、発光雲は拡散し、発光体の先端から扇状に広がりを見せています。



更に 1 分後、発光体は東から高度を上げて、北に向かって軌跡を描いています。通常天体の動きとは逆で、明らかに何か人工的な「物体」が自発的に移動していることを意味します。いろいろと情報を集めて、その正体が明らかになりました。(つづく)